

『平家物語』 壇浦合戦における二位殿時子

——諸本本文の異同とその解釈——

池 田 敬 子

一

『平家物語』の描く壇浦合戦には、ひとたび諸本の本文を比較すればすぐに気付く看過できない本文の異同が存在する。それらには二位殿時子・建礼門院徳子・安徳天皇の造型と同時に物語の全体構想にも関わる重要な異同といわねばならない部分もある。本稿では、二位殿時子の言動に関する叙述に焦点を絞り、延慶本・覚一本・屋代本の本文を読み比べることにより、それぞれの本文の言わんとするところを可能な限り厳密に解釈して行きたい。

『平家物語』の数多い諸本のうち、延慶本・覚一本・屋代本の三本の本文を問題とする理由は、以下の通りである。現存する『平家物語』諸本のうち、最も早く書物の形態で成立したのが延慶本であると考えざるを得ないことは、異論のないところであろう。そして屋代本・覚一本が延慶本を素材源として再編集を行った結果の本文であることも同様に異論のないところと思われる。さらに、覚一本と屋代本を素材として百二十句本を始めとする覚一本周辺本文が生み出され、百二十句本を基盤として八坂系本文が編集されて行った¹⁾という事情を考えれば、『平家物語』

諸本の基本世界を作り上げたのは延慶本・覚一本・屋代本の三本であるというのが妥当であろう。よってそれぞれが言わんとするところを可能な限り精確に把握することが、それ以降の諸本を理解するためにも必要な基本作業であるということになるからである。長門本・『源平盛衰記』などの影響が複雑に絡んでいる場合でも、その基盤には延慶本・覚一本・屋代本のいずれかが存在するはずである。

考察に先立って、壇浦合戦叙述の順序を確認しておきたい。便宜上、覚一本巻十一の章段名を使用して、各段落の要旨を簡略に記す。延慶本・屋代本の章段はそれぞれ「第六本 壇浦合戦事付平家滅亡事」「巻十一 平家一門悉皆滅亡事」と一つであり、覚一本の章段名を使用することが段落や記事内容の把握に便利なためである。

鶏合壇浦合戦

- ① 元暦二年(一一八五)三月二十四日卯刻、門司赤間関にて矢合せ開始。
- ② 知盛、一門・家の子・郎等に奮戦の下知。
- ③ 知盛、阿波民部重能の心変わりを疑う。
- ④ 合戦当初、平家軍優勢。

遠矢

- ⑤ 遠矢合戦
- ⑥ 白旗、空より源氏の舟に下り、イルカの群れ平家の兵船の下を通り抜け、平家の危うきことを示す。
- ⑦ 阿波民部重能、源氏に寝返り、平家たちまち劣勢となる。
- ⑧ 乱戦の中、知盛「御所の舟」に参り「世のなかいまはかう」と告ぐれば、女房達騒ぐ。

先帝身投

⑨ 二位殿、安徳天皇を伴って入水。
能登殿最期

⑩ 建礼門院はじめ、女性達の入水。

⑪ 教盛・経盛・資盛・有盛など一門の人々の入水。

⑫ 宗盛、生捕りとなる。

⑬ 教経、奮戦の末入水。

内侍所都入

⑭ 知盛、「見るべき程の事は見つ」と入水。

覚一本と屋代本の順序は同じである（文章には当然異同がある）が、延慶本は⑥の白旗とイルカの奇瑞を⑧の次に記すという大きな違いがある。⑥は、覚一本・屋代本では未だ趨勢のはつきりしない中での予言としての意味を持ち、⑦の阿波民部の裏切りのきっかけとなっているのだが、延慶本では重能の裏切りで平家が劣勢となり、知盛が敗戦を覚悟した後のため押しとして⑥が機能することになる。そして、延慶本には他の二本にない、

新中納言は一門の人々、侍共、最後の戦せられけるを見給ひて、「殿原や、侍共に禁せてとくく自害し給へ。敵に取られて憂名流し給ふな」とぞ宣ひける

という一文が記され、続いて二位殿が登場する⑨の場面となるのである。

猶、本文の引用はそれぞれ次のテキストに拠った。

延慶本……『延慶本 平家物語』本文篇 下

勉誠社

覚一本……日本古典文学大系『平家物語』下（龍谷大学蔵本）

岩波書店

屋代本……『屋代本高野本対照 平家物語』三

新典社

引用に際し、延慶本・屋代本は漢字平仮名交りに書き下した。また私に、濁点・送りがな・促音表記等を補い、かつ改めたところがある。

二

壇浦合戦において時子が登場する場面は、⑨の安徳天皇入水の段落である。ここで時子は安徳天皇と共に姿を見せ、共に入水する。時子の登場を延慶本・覚一本・屋代本はそれぞれ次のように叙述する。

延慶本 二位殿は今はかうと思われければ、ねりばかまのそば高く挟みて、先帝を負ひ奉り、帯にて我御身に結合せ奉りて、宝剣をば腰にさし、神璽をば脇にはさみて、鈍色の二衣打かづきて、今は限りの船ばたにぞ臨ませ給ひける。

覚一本 二位殿はこの有様を御らんじて、日ごろおぼしまうけたる事なれば、にぶ色のふたつきぬうちかづき、ねりばかまのそばたかくはさみ、神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、主上をいだきたてまつつて、「わが身は女なりとも、かたきの手にはかかるまじ。君の御ともにもいるなり。御心ざしおもひまいらせ給はん人々はいそぎつづき給へ」とて、ふなばたへあゆみいでられけり。

屋代本 二位殿は是を聞き給ひて、急ぎ先帝を懐き奉り、帯にて御身に二所勁く結付け奉り、「後の世までも君の御守り成るべし」とて、宝剣を腰に指し、神璽を脇挟み、練袴のそばを高くはさみ、純色マの衣打かづき、舷へぞ出給ひける。「我は君の御共に参るなり。女也とも敵の手にはかかるまじきぞ。御恵に随はんと思はん人々は、急ぎ御共に参り給へや」と宣へば、国母を始め進らせて、北政所、廊の御方、帥典侍、大

納言典侍以下の女房達、送^マれ奉らじと喚き叫び給ひけり。

この段落には、問題とすべき異同が二箇所存在する。時子がどのように安徳天皇を伴っているかについて、延慶本は背負つて帯で自身の体に密着させ、屋代本は抱いて帯で自分に結びつけ、覚一本は抱いているのみ、の相違がある。この点は安徳天皇の描写にとつては非常に重要な意味をもつ異同と考えるが、本稿の目的である時子の造型・言動の検討からはやや外れるので、ここでは取り上げない。

もう一箇所の大きな異同は、傍線を施した覚一本・屋代本に見える直前の段落を受ける句と時子自身の発言である。これは叙述順序の相違に由来すると思われる。この段落の直前に、覚一本・屋代本では、⑧知盛が御所の舟にやつてきて戦況の絶望的なことを伝え女房達が泣き叫ぶ場面が位置する。「この有様を御らんじて」と「是を聞き給ひて」の違いはあるが二本とも⑧の騒ぎに覚悟を決めた時子が行動を起こすということを明確にするために挿入した句であると読める。その後の発言は「女なりとも敵の手にはかからず」が主旨であり、これは「源氏の兵士達に捕えられはしない」の意味で解釈すべきであると考ええる。この点については、やや詳しく考察を加える必要があるが、その前に延慶本の前段落とのつながりを確認したい。

延慶本の時子登場の直前は、⑥白旗とイルカの奇瑞、それを受けての先にも引用した知盛の発言、

新中納言は一門の人々、侍共、最後の戦せられけるを見給ひて、「殿原や、侍共ふまかに禁せてとくく自害し給へ。敵に取られて憂名流し給ふな」とぞ宣ひける

である。阿波民部の裏切りからたちまち劣勢に陥った平家の絶望的な状況をだめ押しするこの白旗とイルカの件によつて、知盛は一門に「自害し給へ」と呼びかけた。知盛は「最後の戦せられける」人々に呼びかけたのであろうが、時子は当然の如く自らにも向けられたことばと受け取った、と延慶本は言いたいのであろう。波線を施した

「二位殿は今はかうと思われければ」がそのことを物語っているとされる。よつて、知盛のことはに直結して時子の行動が記され、時子の発言はなくともその後は女性達の入水へと進行するのである。

一方、覚一本と屋代本の編者は、延慶本の白旗とイルカの奇瑞の記事を阿波民部裏切りの前に移動した。このことよつて、重能の裏切りのきつかけが示されることとなり、その点では筋の運びが合理的になったといえよう。しかしその時点では知盛の「自害せよ」のことはそのまま残すのは不適當となり、⑥から知盛のことは削除された。となると、⑧の知盛の御所の舟へやつてきての言動と女房達の反応を受けて、時子の行動が展開されることになる。ここで、再び覚一本・屋代本の⑧段落とのつながりに戻ろう。⑧段落のこれまでの解釈には問題も存するので、煩を厭わず三本の本文を比較対照する。

延慶本 新中納言は少しも周章たる気色もし給わず。女院・北政所なむどの御船に参り給ひたりければ、女房達音々に、「いかにく」と、あわてふためき問ひ給ひければ、「今はとかく申すに及ばず。軍は今はかう候。夷共舟に乱れ入り候ぬ。只今東のめづらしき男共、御覧候わんずこそ浦山敷く候へ。御所の御船にも見苦しき物候はば、能く能く取捨てさせ給へ」とて打咲ひ給へば、「かほどの義に成りたるに、のどかげなる気色にて何条の戯事を宣ふぞ」とて、音を調べて、をめき叫び給へり。

覚一本 新中納言知盛卿小船にのつて御所の御舟にまいり、「世のなかいまはかうと見えて候。見ぐるしからん物どもみな海へいれさせ給へ」とて、ともへにはしりまはり、はいたりのごうたり、塵ひろい、手づから掃除せられけり。女房達「中納言殿、いくさはいかにやいかに」と口々にとひ給へば、「めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめ」とて、からくくとわらひ給へば、「なんであのただいまのたはぶれぞや」とて声々におめきささげ給ひけり。

屋代本 新中納言知盛、御所の御船に参り給ひて、「見苦しき物ども、急ぎ皆海に沈めさせ給へ」とぞ宣ひける。
 女房達「此世の中はいかに〜」と宣へば、新中納言最騒がぬ体にて、「軍は已にかう候。今日より後は、女房達の珍しき東男共をこそ、御覽せんずらめ」とて打咲ひ給へば、「是程の事に成りて、何条今の戯れぞや」とて、女房達喚き叫び給ひけり。

文章の叙述自体には、「世のなかいまはかうと見えて候」をまず告げる覚一本、女房達の質問に答えて「軍は今にかう候」「軍は已にかう候」という延慶本・屋代本と順序の違いがあるが、この絶体絶命の状況を告げて後、知盛が女房達に「めづらしき東男を御覧になるだろう」と言い、女房達が「何という戯れを」と騒ぎ立てるのが、この場面の骨格である。「口今東のめづらしき男共、御覽候わんずる」(延慶本)・「めづらしきあづま男をこそ御らんせられ候はんずらめ」(覚一本)・「今日より後は、女房達の珍しき東男共をこそ、御覽せんずらめ」(屋代本)と、表現はそれぞれ微妙な違いがあるが、要するに平家の女性達が今まで見たことのない東国の男達を「見るであろう」というのである。この「御らんず(見る)」について『平家物語全注釈』は、男女が直接顔を合わせる、即ち婚姻の意味があると指摘し、その見解を引き継ぐ注釈も複数ある。「御らんず」は「見る」の尊敬動詞であるから、「見る」と同様に「男女の婚姻」に関わる語義があり、その用例も実際に存在する。果たしてこの場合もそのように読むべきであろうか。

『平家物語』自身の中には、次のような用例を見ることができると。

夢まぼろしの世のなかに、みにくきものをかた時もみてなにかせん、おもはしき物をみんとすれば、父の命をそむくに似たり。
 (覚一本 卷十 横笛)

滝口時頼が横笛との仲を父に反対されて出家する際の煩悶のことばである。時頼(男)がみにくき物(女)を見る、

あるいはおもはしき物(横笛、女)を見る、のである。

いかならん人にも見えて、身をもたすけ、おさなき者共をもはぐくみ給ふべし。(覚一本 卷七 維盛都落)

維盛が都落に際し、妻に語ることはであるが、あなた(維盛の妻、女)がどのような人にも見えて、という。これは「見ゆ」であつて「見る」ではない。いずれも男女の関係(婚姻)を指しているが、男が女を「見る」、女が男に「見ゆ」の違いがある。

ただこれよりやまづたひに宮こへのほつて、恋しきものどもをいま一度みもし、見えての後、自害をせんには
し。 (覚一本 卷十 首渡)

右と同様の言い回しは「高野卷」にも「維盛出家」にも検することができるが、「恋しきものども」には妻に加えて二人の子供も含まれるため、男女関係をいう例とは言い難い。⁽⁴⁾ これらの例からは、『平家物語』では、「男が女を見る」「女が男に見ゆ」の用例は確かに見出せるが、「女が男を見る」の言い回しで男女関係をいう例は見あたらない、ということになる。この傾向が古典作品において汎用性のあるものかを検証しておく必要がある。

まず、『竹取物語』には、かくや姫に求婚して難題を課された五人の人々のうちで、石作の皇子が、

猶、この女見では、世にあるまじき心地のしければ、「天竺にある物も、持て来ぬ物かは」と、思ひめぐらして天竺に出かけたと思わせ、大和国十市郡の山寺の鉢を「仏の御石の鉢」と偽るのだが、この傍線部は明らかに「石作の皇子がかくや姫を妻とする」と解釈すべき例である。

『枕草子』「にくき物」(二五段)に、

わがしる人にてある人の、はやく見し女のことほめいひ出などするも、程へたることなれど、猶にくし。まして、さしあたらんこそ思ひやられる

と見えるのも、「男が女を見る」男女関係の表現である。また、『源氏物語』「桐壺」には、

源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、たくひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見ぬ、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける

と、葵の上と結婚したばかりの光源氏がどうしても藤壺へのあこがれにとらわれ、そのような女性を妻としたいと煩悶するところで「見る」が使用されている。もう一箇所、「橋姫」に宇治八宮が、亡くなった北の方を思う場面に次の例がある。

かかるほどに、住みたまふ宮焼けにけり。いとどしき世にあさましうあへなくて、うつろひ住みたまふべき所の、よろしきもなかりければ、宇治といふ所に、よしある山里持たまへりけるにわたりたまふ。……中略……かく絶え籠りぬる野山の末にも昔の人ものしたまはましかばと、思ひきこえたまはぬをりなかりけり。

見し人も宿も煙になりにしをなにとてわが身消え残りけむ
生けるかひなくぞおぼしこがるるや。

次の「帚木」の例は「女が男との婚姻関係を持つ」の意味の例である。

ことさらに情なくつれなきさまを見せて、例の腹立ち怨ずるに、「かくおぞましくは、いみじき契り深くとも、絶えてまた見じ。限りと思はば、かくわりなきもの疑ひはせよ。ゆくさき長く見えむとおもはば、つらきことありとも念じてなほに思ひなりて、かかる心だに失せなば、いとあはれとなむ思ふべき。

馬の頭が、「女が自分との婚姻関係を末永く続けようと思うなら」と言っており、女の側から婚姻関係・男女関係

を言う場合は「女が男に見ゆ」のパターンを取ること、『平家物語』の先例として認定できよう。

また、時代は下がるが『徒然草』には、父親が娘について語る次の例を見る。

因幡の国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞えて、人あまた言ひわたりけれど、この娘、ただ粟をのみ食ひて、さらに米のたくひを食わざりければ、「かかる異様の物、人に見ゆべきにあらず」とて、親許さざりけり。
(四十段)

『平家物語』と近い時代にもこのような例が見られることは「女が男に見ゆ」の言い回しが平安・中世を通して普通であることを示すといえ、婚姻関係・男女関係については、「男が女を見る」「女が男に見ゆ」というのが普通であったと結論してよからう。

今一例、『源氏物語』には「見る」の尊敬動詞「御覧す」で男女の関係をいう例が見られる。光源氏が北山の某僧都のもとで垣間見た若紫を引き取りたいと話した時の僧都の答である。

いとうれしかるべき仰せ言なるを、まだむげにいはいはけなきほどにはべるめれば、たはぶれにても御覧じがたくや。そもそも女は、人にもてなされて大人にもなりたまふものなれば、くはしくはえとり申さず。かの祖母に語らひはべりて聞こえさせむ。

まだまだ子供なのであなたが妻となさるのは難しそうだ、というのであろう。よって、「御覧す」が「見る」同様の意味で使用されることはあるのだが、『平家物語』では覚一本でも延慶本でも現在問題としている箇所以外で確定的な使用例は見出せない。⁽⁵⁾

この結果からは、知盛の発言を必ず男女の婚姻の意味で解釈すべきであるという積極的な根拠は見出しがたいことになる。むしろ、たった一例でもどうしてもそのように読まれねばならぬ場合が文学作品には見出されることは

承知しているが、無理のない読みが成立するならばわざわざ無理な解釈を取る必要はあるまい。ここでは、無理のない読みが成立しうるか、どうであろう。これまで平家一門の中で暮らしてきた女性達にとって、東国出身の武士達に舟に踏み込まれ捕えられることは、想像を絶することであつたことは容易に推察できる。「東男を見る」とは、捕えられ見張られて護送されることを自動的に意味したのであろう。合戦で女を殺すことはなかつたにしても縛られ尋問されることはあり得た。⁽⁶⁾「からく」とわらひ」「打咲ひ」で発言されるには、彼女らにとっては酷な「戯事」「たはぶれ」であつた、と読んで何の不審もないと考える。さればこそ覚一本・屋代本では時子が「女なりとも敵の手にはかかるま」と行動を起こし、屋代本では他の女性にも入水を勧めたのであろう。

もう一箇所延慶本で、知盛が「只今東のめづらしき男共、御覧候わんずるこそ浦山敷く候へ」という「うらやまし」とは何が「うらやましい」のかを理解しておく必要が残っている。これは、討死覚悟の合戦のさなかにいた「男」としては、死と直結しないで「敵を見る」女に対して抱いた感想であろう。覚一本・屋代本では削除されたが、延慶本には戦う一門に「自害せよ」と下知する知盛のことはがあつたことと呼応するだろう。

二二

さて、安徳天皇と共にふなばたへ進み出た時子が描かれた後、『平家物語』はまず安徳天皇の様子を描写し、三本揃つて安徳天皇の時子への問いを記している。

延慶本 あきれたる御気色にて、「此はいづちへ行かむずるぞ」

覚一本 あきれたる御さまにて、「尼ぜ、われをばいづちへぐしてゆかんとするぞ」

屋代本 あきれさせ給へる御様にて、「此に又何ちへぞや、尼ぜ」

八歳とはいえ年齢よりは大人びた、と直前に安徳天皇の様子を語りながら、三本とも実に幼い問いを記した上で、これに対しての時子の答えは大きな異同を見せる。これまで延慶本・覚一本・屋代本の順に述べてきたのであるが、ここでは考察の順序を入れ替える。

まず、屋代本は、

……と仰せられける御詞の未だ終らざるに、二位殿、「是は西方浄土へ」とて、海にぞ沈み給ひける

と、極端にあっけない叙述でこの段落を終えてしまう。このあっけなさは何を意味するのか。延慶本を素材としていることは、対校していれば疑問の余地なく了解できるのに、ここでは延慶本本文を全く一顧だにせず叙述を終結させている。同じ現象は後白河法皇が大原寂光院の建礼門院を訪ねる大原御幸でも出現する。六道譚を有する覚一本・延慶本と比べて屋代本はやはり壇浦合戦の再叙述の部分が極端に短いのである。

過ぎにし歳の春の暮れ、先帝を始め進らせて一門の人共、門司赤間の浪の底に沈みしかば、残り留る人共の喚き叫ぶ声、叫喚大叫喚の地獄の底に落ちたらんも、是には過ぎじとこそ聞へしか。

(卷十二 法皇女院閑居勸覧の為大原御幸事)

考え得る理由の一つには、屋代本成立に関わった人々のリアリティ追求の一現象である可能性が挙げられるかもしれない。一門滅亡の時が迫るなかで、敵の手にかかることなく「君の御共に参る」と宣言し、「急ぎ御共に参り給へや」と女性達を促した時子の行動として、一直線に入水することが最もふさわしいともいえるであろう。また今一つの理由として、灌頂巻を立てることなく「六代被斬」で全巻終結する屋代本としては、後の建礼門院記事を重ねたくないので六代の最後を相対的に重みを増させる方法をとっているとも言え、そのためにも大原御幸で繰り返されることになる場面を切り詰めるという、全体構想からの要請があったともいえる⁽⁷⁾。しかし、覚一本・

延慶本と比較する中では一種の肩すかしの感は否めない。

次に、覚一本を見る。引用文中には記号を入れて、後の延慶本本文との比較が容易にできるようにしておく。

……と仰せければ、**A**いとけなき君にむかいたてまつり、涙ををさへ申されけるは、**B**君はいまだしろしめされさぶらはずや。**C**先世の十善戒行の御ちからによつて、今万乗のあるじと生れさせ給へども、**D**悪縁にひかれて、御運既につきさせ給ひぬ。**E**まづ東にむかはせ給ひて、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西方浄土の来迎にあづからんとおほしめし、西にむかはせ給ひて、御念仏さぶらふべし。**F**この国は心うきさかゝにてさぶらへば、極楽浄土とてめでたき処へぐしまいらせさぶらふぞ」となく／＼申させ給ひければ、**G**山鳩色の御衣にびんづらゆはせ給ひて、御涙におほれ、ちいさくうつくしき御手をあはせ、まづ東をふしをがみ、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西にむかはせ給ひて、御念仏ありしかば、**H**二位殿やがていだしき奉り、**I**「浪のしたにも都のさぶらうぞ」となぐさめたてまつつて、ちいろの底へぞいり給ふ。

覚一本の時子は、**A**終始安徳天皇に向かつて語る。**C**前世の十善戒行によつて現世に天皇として生まれしたが、**D**「悪縁」によつて天皇としての運は尽きたことを告げ、**E**天皇として祖先の伊勢神宮に別れの挨拶をし、来世のために西方浄土に向かつて念仏するようにと行動を指示する。そして屋代本同様に安徳天皇の問いへの直接の答えとなる**F**極楽浄土へお連れすると。物語のなかで初めて実際の姿を見せた安徳天皇に、時子は最初で最後となる天皇の「行動」を促すのである。安徳天皇はその指示通り**G**行動する。**H**時子は安徳天皇を抱き、**I**慰めのことばをかけつつ入水する。この場面は安徳天皇にとつて非常に重要な場面であり、その狂言回し役が時子である。延慶本・屋代本とは異なつて覚一本はこの場面を「主上」で押し通し、安徳天皇を「先帝」とは呼ばない。おそらく覚一本がここで表現したかったのは、地の文の助けをも得て、壇浦での平家は三種の神器と共にある主上安徳天皇とその

外戚一門であつて朝敵ではないことを、安徳天皇の行動を通じて時子が示して見せた、ということなのであろう。

この部分は灌頂卷六道譚でも、建礼門院によつて、ほとんど同文で繰り返され、印象の強い場面となつてゐる。

覚一本「先帝入水」での安徳天皇については、物語構想上の大きな問題があると考へてゐるが、本稿の目的からはそれるので、ここでは時子の役割を確認することとどめて延慶本に移らう。

……と仰せ有りければ、「**㊦**君は知食さずや、**㊧**穢土は心憂き所にて、夷共が御舟へ矢を進らせ候ときに、極楽とて、よに目出き所へ具し進らせ候ぞよ」とて、**㊨**王城の方を伏拝み給ひてくだかれけるこそ哀なれ。「南無帰命頂礼天照大神・正八幡宮、慥に聞食せ。**㊩**吾君十善の戒行限り御坐せば、我國の主と生れさせ給ひたれども、未だ幼くおわしませば、善悪の政を行ひ給わず。何の御罪に依てか百王鎮護の御誓に漏れさせ給ふべき。**㊪**今かかる御事に成せ給ひぬる事、併ら我等が累葉一門、万人を軽しめ朝家を忽緒し奉り、雅意に任せて自ら昇進に驕りし故也。**㊫**願はくは今生世俗の垂迹三摩耶の神明達、賞罰新たにおわしませば、設ひ今世には此誠に沈むとも、来世には大日遍照弥陀如来、大悲方便廻して必ず引撰し玉へ。**㊬**今ぞ知るみもすそ川の流れには浪の下にも都ありとは」と詠じ給ひて、最後の十念唱つつ、波の底へぞ入られける。

覚一本と同じ記号をつけて引用したが、類似の部分でありながら内容が異なるところは小文字のアルファベットとし、また覚一本に全く類似箇所が見えない所は**㊭**で示した。如何に覚一本と異なつてゐるか一目瞭然であろう。まず安徳天皇の問いへの直接の答え**㊮**を語つたあとは、時子は全く自分の思いのみをかき口説いてゐる。しかも王城一都に向かつて天照大神と八幡に対しての心情吐露である。安徳天皇は、幼帝ゆえに自らは政を行つてゐないのだから悪政の罪もないはずなのに、なぜ皇室守護の神々の誓いから外れるのかと問いながら、最も注目すべき**㊯**を語る。

今かかる御事に成せ給ひぬる事、併ら我等が累葉一門、万人を輕しめ朝家を忽緒し奉り、雅意に任せて自ら昇進に驕りし故也。

これは平家一門が朝敵として滅ぶべき原因を認めた発言である。したがって[現世]においては神明の罰によって滅ぶとも阿弥陀による来世での救済を願う、とのことが続くのである。自らの一門の「朝敵としての滅亡」を肯定することを時子に語らせることが、延慶本のねらいであったと了解できる。おそらく、覚一本編者にはこの延慶本の主張は受け入れ難かつたのであろう。覚一本は全く異なる方向へ延慶本本文を改編したのである。屋代本のあつけない叙述も、延慶本のこの叙述を受け入れ難かつたゆえの極端な本文カットであつたかもしれない。

時子の発言の最後[目]も、覚一本とは異なる全くの時子の感慨である。延慶本では、時子は安徳天皇をおぶつてはいても、あの幼い問い以降はその存在が時子の被く鈍色の衣に隠されたかの如く、ひたすら時子の姿が前面に押し出されており、「二位殿入水」的一幕となつていふべきであらう。延慶本が安徳天皇を「先帝」と記し続けるのも故あつてのことなのである。

では、覚一本灌頂巻にある建礼門院の六道譚「地獄」を語るなかで繰り返された安徳天皇入水場面は、延慶本ではどのようになつてゐるであらうか。延慶本の大原御幸(第六末 法皇小原へ御幸成る事)では、女院の六道譚中の地獄では安徳天皇入水を記さず、六道譚終了後に回されている。壇浦合戦での叙述とはかなり異同がみられるが、ここでは安徳天皇の問い以降に限定して取り上げる。

「いづくへ行くべきぞ」と先帝仰せられしかば、「浄土へ具し進らすべし」とて、先ず伊勢大神宮の方を伏し拝み奉り給ひて、西に向て、「流転三界中、恩愛不能断、奇恩入無為、真実報恩者、南無西方極樂教主阿弥陀仏」と十念高声に唱給ひて、「設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、光明遍

照十方世界、念仏衆生撰取不捨の御誓ひたがへ給わず、必ず引撰を垂給へ」と唱もあへ給はず、海に飛び入り給ひし音計りぞかくかに船底に聞へしかども、消えはて絶入りにし心の内なれば、夢に夢見る心地して、貞にも覺へ侍らざりき。

壇浦合戦での時子のことばとは随分異なっている。かつそこにはなかった「伊勢大神宮」の方を礼拝するという行為が加わっている。建礼門院の語りの中という設定であるから、建礼門院に聞こえたことのみという限定が加わるのかもしれないが、建礼門院としては、時子が平家を朝敵と認める発言をしたことを、法皇には伝えたくなかったということにしているのかもしれない。それにしても、壇浦で「今ぞ知る」歌に続き「最後の十念唱つつ」とのみ書かれた最後の十念がここでは「流転三界中」以下詳細に記され、さらに阿弥陀の四十八願中の第十八願が加えられるなど徹底した浄土思想が語られていて、延慶本に多く見られる唱導色そのままというべきところとなっている。ここには安徳天皇どころか、時子の姿すらおぼろげになっているというべきかもしれない。

壇浦での時子の言葉は、時子の入水を語る建礼門院の発言の少し後に、女院自身のことばとして見える。

誠に振旦高麗には賢をえらび智を尊びて、其氏ならねども天子の位を踐むとかや。我朝には御裳濯川の御流の外は、此国を治め給わず。然に先帝は神武八十代の正流を受けて、十善万機の位を踐給ながら、齡未だ幼少にましまししかば、天下を自ら治る事もなし。何の罪に依てか、忽ちに百王鎮護の御誓に漏れ給ぬるにや。是即我等が一門、只官位俸禄身に余り、国家を煩はすのみにあらず、天子を蔑如し奉り、神明仏陀を滅し、悪業所感の故也。

延慶本は、壇浦では時子に、大原御幸では建礼門院に、平家一門を朝敵と認める発言をさせるのである。建礼門院の法皇に対する語りの中での時子の発言を変更したのは、建礼門院にこれを認めさせるためであったと読める。こ

れも延慶本編者が主張しなかったところであるのだろう。覚一本が壇浦での入水場面ほほそのままを繰り返すのは、明確な延慶本の方法への拒否であろう。

ところで、延慶本はなぜここに突然「先ず伊勢大神宮の方を伏し拝み奉り給ひて」と記したのであるうか。壇浦では伊勢大神宮に「聞し召せ」とはいいながら時子が向かっていたのは「王城のかた」であった。延慶本の引用部分の直前には、壇浦合戦では記されなかった建礼門院と時子の問答があり、時子が生き残って後の世を弔えと遺言する場面がある。この遺言はおそらく『閑居友』に基づくものと思われる。⁽¹⁰⁾

女人をば昔より殺す事なし。構えて残り留まりて、いかなるさまにても後の世を弔ひ給ふべし。親子のする弔ひは、必ず叶ふ事也。誰かは今上の後世をも、我が後世をも弔はん。

(下巻第八話 建礼門女院の御庵に、忍びの御幸の事)

延慶本とほほ同文であり、小異はあるが覚一本灌頂卷六道譚にもこれは引き継がれている。建礼門院の後白河法皇に対面しての語りに延慶本はこの説話を採用したものとおぼしい。『閑居友』のこの直前に「まづは伊勢大神宮を拝ませ参らせ、次に西方を拝みて入らせ給ひしに」とある、この文言を延慶本は順序を逆転させて遺言の後に取り込んだものであろう。大原御幸での法皇との問答に『閑居友』の説話を素材として利用したが、それを遡って壇浦にまでは及ぼさなかった。それゆえ延慶本では壇浦と大原御幸とで非常に異なる時子の発言が記されることになったのであろう。というより、壇浦では延慶本は時子に「朝敵として滅ぶ平家」を認める発言をさせることにより重きをおいていて、大原御幸で建礼門院が法皇に語ることばとの整合性を重視していなかったという方が、より正確かもしれない。

それに対して、覚一本は壇浦と六道譚に整合性を持たせることを重視した。しかし、時子の遺言は六道譚に必要

であった。^①その際覚一本は延慶本本文のみを素材としたのではなく、『閑居友』を再び参看したのではないのだからか。「伊勢大神宮を拝み参らせ」という一句が覚一本の壇浦での時子の発言を引き出す契機となつたのではないかと推察する。

もう一方で屋代本は、延慶本の本文をとらず、かつ覚一本のような改変を行うこともなく、壇浦・六道譚の両方を非常に簡略にすることで自らの道を選び、「六代被斬」で全巻を完結させるもう一つの『平家物語』の全体構想を完成させたものと思われる。

延慶本・覚一本・屋代本が三者三様に『平家物語』を作り上げたことを如実に示しているのが、壇浦合戦安徳天皇入水場面の本文異同であるといえよう。

註

(1) 『平家物語』の諸本論は、簡単に整理して記すには複雑多岐に及んでいるが、あえて山下宏明氏・千明守氏らのこれまでの立論に従う立場で大きな道筋のみを記した。近年櫻井陽子氏によって現存延慶本に後の改変が見られることが指摘されているが、すべての本文についての検証は現段階では困難なこともあり、現状をそのまま受け入れる形での考察になったことを、おことわりしておく。なお時子の呼称については、筆者はこれまで「二位尼時子」とすることが多かったが、武久堅氏の「二位尼」は通称であり『平家物語』における地の文での使用例はなく、「二位殿時子」が本文に忠実な呼称であるとの指摘(関西軍記物語研究会第八十五回例会(二〇一五年一月 大阪工業大学) 研究発表「外祖母・二位殿」の底意地―琵琶法師覚一検校の力点)により、「二位殿時子」とし、論中では「時子」としたところが多い。

(2) 安徳天皇が背負われているか、抱かれているか、帯で結いつけられているか否かは、後の安徳天皇自身の行動を記すかどうかと関わって壇浦合戦入水場面叙述の重要な要素となると考えるが、このことは安徳天皇に関して、特に覚一本の叙述を通して考える時の問題であると思われる。別稿で論ずる心づもりである。

(3) 富倉徳次郎氏『平家物語全注釈』を受ける形で、この点を指摘する諸注には新潮日本古典集成『平家物語』・『新定源平盛

「衰記」(水原一氏)、三弥井古典文庫『平家物語』(佐伯真一氏)、新日本古典文学大系『平家物語』(山下宏明・梶原正昭氏)などがある。

(4) 覚一本の巻七「維盛都落」は、延慶本では本文が異なり、「見る」「御覧ず」を使用しない。巻十「横笛」は本文が相当異なるものの「相見る」の使用が一例ある。また巻十「首渡」「高野卷」「維盛出家」にも覚一本では同様の表現があり、延慶本は「恋しきひとをも今一度見ん」「北方に替らぬ形を今一度見へ奉て」とするところがある。「替らぬ形」と限定される場合は単に視覚表現と理解すべきであろう。

(5) ここで引用した作品はそれぞれ次のテキストに依った。

『竹取物語』 新日本古典文学大系 『竹取物語』 伊勢物語』 岩波書店

『枕草子』 新日本古典文学大系 『枕草子』 岩波書店

『源氏物語』 新潮日本古典集成 『源氏物語』 新潮社

『徒然草』 新日本古典文学大系 『方丈記 徒然草』 岩波書店

なお、『伊勢物語』六二段の女が昔の夫に給仕する場面で、「もと見し人の前に出で来てものくはせなどしけり」が、辞書の見出し語「みる」の用例に掲げられることがあるが、女が男を「見る」との例として、「みし」と読むべきか、本文で述べたとおり女が男に「みえし」と読むべきか、問題があろう。

(6) 『平治物語』には常磐が六波羅で糾問される場面があり、『閑居友』には建礼門院が後白河法皇に語ったとして、時子の入水後「残れる者ども、目の前に命を失ひ、あるは、縄にてさまざまにしたため、いましむ。少しも情けお残す事なし」との叙述がある。女性のみに関する描写ではないと思われるが建礼門院の乗っていた舟であるから縄で縛られたなかには女性もいたであろう。

(7) 拙稿「平家物語八坂流本における巻十二」(『軍記と語り物』第22号一九八六年三月、『軍記と室町物語』二〇〇一年に所収)において、巻十二「六代被斬」で物語を終結する諸本の終わり方について論じたことがある。

(8) このことに関しては、関西軍記物語研究会第八十四回例会(二〇一五年七月二六日龍谷大学)で「安徳帝入水叙述の解釈―『平家物語』異本文比較の意味―」と題して研究発表を行った。本稿注(2)に記したことも同様であり、別稿で論ずる予定である。

(9) 「我等が累葉一門、万人を軽しめ朝家を忽縮し奉り、雅意に任せて自ら昇進に驕りし」は、覚一本の構成によって指摘すれば、巻五までに叙述される清盛の王法破壊の悪行そのものといえる。忠盛が得た殿上人の地位を引き継いで、その後清盛を

棟梁とする一門が中央政界に華々しく参入し榮達を極めるさまは、清盛の大政大臣着任、清盛子弟の官位昇進、娘徳子の高倉天皇入内、安徳天皇の誕生と幼くしての即位と次々に達成され、それと並行するように、「殿下乗合」以降福原遷都にいたるまでの「平家の悪行」が巻五までに描かれている。それらは王法破滅の悪行としていざれ朝敵として滅ぶことも予言的に記されていた。そのことを時子の口を通じて語らせることは、清盛亡き後の平家一門を代表する者として、延慶本は時子を想定していたということでもあろう。

(10) 『閑居友』のこの説話の末尾には、「これは、かの院の御あたりの事を記せる文に侍りき。何となく見過ぐしがたくて、書き載せ侍るなるべし」ということばがあり、後白河法皇周辺に大原御幸の際の建礼門院との対話を記録した文章があったことを示唆する。『平家物語』が取り入れたのが『閑居友』からであるのか、別の資料であるのかは決定しがたいが、新日本古典文学大系所収の『閑居友』脚注に、「平家物語における中心的主題であるところの六道輪廻の事が閑居友にはほとんど記されないところから、説得力にやや乏しい」として『平家物語』の直接の典拠と考えることに否定的見解が述べられている。しかし、典拠となるものに六道輪廻の事が述べられていなければ、『平家物語』に六道輪廻の事が書かれない、ということもあり得ないはずで、典拠となるものがいかなる思想で叙述していても、『平家物語』が六道輪廻に建礼門院の半生をなぞらえるという発想をもつことは可能であって、むしろ『平家物語』が自らの思想として六道輪廻を据えてその上に『閑居友』の叙述を取り込んでいったと考えるほうがふさわしくはないだろうか。このように考え、本稿では『閑居友』に基づく」と記した。

(11) 覚一本における時子の遺言の意味については、拙稿「覚一本の選択―二位尼と二つの遺言―」(『軍記と室町物語』二〇〇一年)で論じたことがある。

*本稿は、大谷学会研究発表会(二〇一五年一〇月二九日 大谷大学)において、「平家物語」先帝入水叙述の検討―二位尼時子の言動の文脈―と題して行った研究発表をもとに再検討し、かなりの増補を行ったものである。

(大谷大学教授 国文学)

〈キーワード〉延慶本、覚一本、屋代本